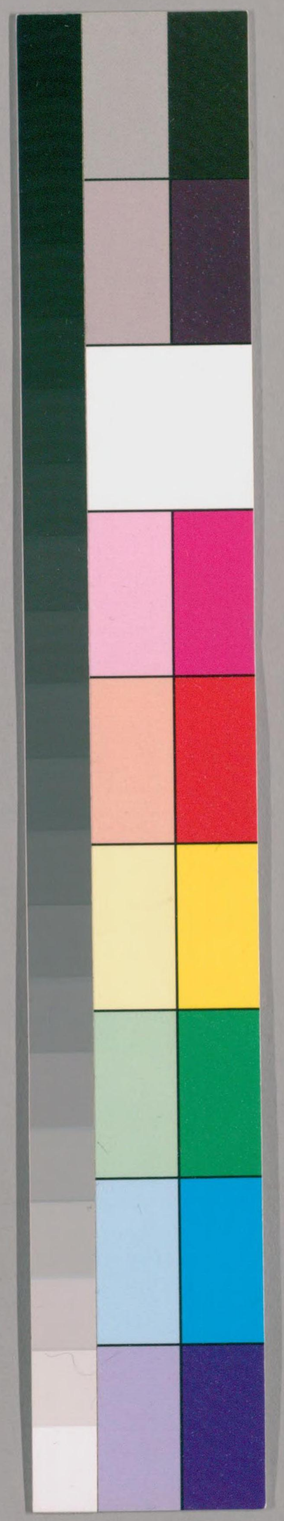
よしなし草

863
113



国立国会図書館　タイトル『よしなし草』 請求記号 863-113

ガラス使用

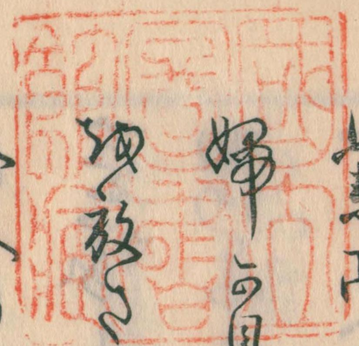
863
113

よしなし草

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』 請求記号 863-113

ガラス使用

863-113



北東亭白菊居士とはの人乃記と聞き
婦の具をとりたる七十餘年業現
地放さすうひ学新業時と思ひたき
故人乃句意を見る人あ[illegible]語集に
あ字し古語をもてつらにさせし
何の[illegible]のし時置る言[illegible]なれ

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』　請求記号 863-113
ガラス使用

と聞くかゝ付る自らしかし草と題
常に坐右ひ免も新なるとしの去年
乃冬なき人の数に入のくをしく草新
墓塚に杉舞しる代をしこひそのに
櫻木にうゝしてなくの知記念なきハ
やと文政戊子新春
八十日居 二世史等誌

古人いつる事あり知る者をいたれ
いふ者ハ老らにと永其いふ者にして
先哲の詠句にちうけくをもし侍ぬ
彼いたさる人の君を稱せかえかひ事
ひうこ言をなさし侍ハ此書の幸い

ならんものをいふものを例のしらざる
しらよ弓張弥の図は志らら老人の所
から序を附そ文政丁亥の秋

三序

国立国会図書館

貞享元子東武在庵

わらやせんん

まちしや草餅孔穂に出ける事　蕉翁

こゝろ青さしと云ものを麦孔早く穂の出しまれを重
穂を抜とり少に莢臼にてさいと挽き實と皮を
箕にて簸出し少しよ過ぎる実を咎しなりさし
出ける事穂なれを まちし孔名あまたの貧家

らに白翁編

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』　請求記号 863-113
ガラス使用

新麦の出来殊に用ゆる粮なり菓子にも宜とし
清少納言枕の草紙に云ふ者にしといふも此を人の
もて来たる我者さ薄やうを艶なる硯乃ふたに
ぬるゝ事は勢こしにさぬらへとも
一条院の后定子の宮にはあらせ勢たるを見もめて
たるひたる事あり其事せうしといふは葉集に
用ゆらしに麦をむ弱の事なれと猶も思しく

おも亟ってぬをといふ事によりて猿垣越（マセコシ）馬堰（ウマセキ）の上下略
（マセ）歟とはのりいふて麦と志る勢まゐらすの草事
乃趣なり長徳乃年間なれハ事乃ゆちさ
かんにして万葉古今集に数ちわなるを見さ
ひ色宮さそもそらに覚えてもそしたる事
世なれたまや越といふを后宮も麦の事と聞
とりまふ其世のこやひをおもふ屋きなり事

蕉翁の殺句を書きしの青くうるりしき哉
草餅の穂に出ゝる程とめて與し給ふ時節
乃とも合せなば面しや

貞享二丑年
鱸乃飛ふたてのり野中新日家外　蕉翁

貞享四卯年
夕日家町中に飛ふこてふこの角　其角

この二章同巣の同狗の幢の飛ふたてのりといふ
ふてさ飛しきを前章稽是なるにやそ吟に

生れ猶あるを手柄にて芳まる時を二義の糟粕
とていたく和あ不和りといへ事

貞享四卯年
誰やらの姿に似たりそさ乃たあ　蕉翁

詞書に嵐雪の許より正月小袖を贈りそれを
とあり　翁淥川を葬年越の時を門人かゝりく
木綿新節衣をまゐらする例にて嵐雪ら利
まゐらせる前書なれを嵐雪をのりてともて

又さと大晦日の夕方迄しまれ節着いつも
と書ひよき絹まてそうしまゐら勢しを木綿
なりさまを不機嫌の体なれども大晦日なれば
仕替置き余日もなれば詮方なくよき絹を
着ゐふたる所吟なりとぞ其角嵐雪を始
門人れのしに服を用ゆ正月は殊更なり正
月たのりなれども翁に上服をすめ給ふも

取引し給ひさるを呉服店にて注文取遠
たる趣に偽りよき絹を見せまゐら勢しとし
芭蕉翁は三界無所住の大隠なれば衣食乃
美をぬぎ捨ひ勿論なるを先代旧事記にも
人畜の異者依衣服有無尊卑之差者依衣服品
別と云り

貞享五辰年
あてくぞのさらしたるしの次柳の花　蕉翁

紀貫之おさ和名を阿古久曽といへる貫之初瀬
へまゐて侍りて前の詞書に梅の花をお
ゑるよこゑまあとありて「人」をいさなら詠も
志らぬ物さかりて花そむし乃香に匂ひける
と詠りしをたもふに貫之故郷に帰りて前あ
こくそといひし此の梅今ようるはしく世うし此
匂ひ那りのしとれ前のさ国ゆとあそれなり

と祖翁句の如かゝにあこくそと置ゆふ故あまぶ
故ら居たしはとも此前梅を世うのし此
香に紅の花々るとあの屋きを花と詠あ
ことも詞書に梅をおてとあるから前にも
花とよ先ゆる程詠も詞書の再歌にならぬ
やうに詠遠き前のならひまてかくよまれ
ゑる程甚あら詠もしはなとう祖翁も梅

として家の言を感じたるふなる事しし
別論あこくぞと濁るならひなりとハ神代巻
或は大抜なるに屎（クソ）とある我高貴乃御前そ
よそ上る言の侵（イヤギ）を避（サケ）てそ我濁るならひと
いへ是あるに近世古事記傳にそと濁る事
ほのことなる梨古書に懇ひたる事なし
濁音にしよまれたるもよし然き事なりと

云り又垂加靈社の藻塩草に清濁の沙汰
なし又吉川家教受此人乃云食物は人の
精氣を嘗ひたる其屑（クヅ）を下に屎なりも
やはりくぞとおごる事き訓なりとも云り
とやれかく万葉にはいまは用然きあけつゝ
まてにこゝろも時宜にしてぞといふとも罪な
かる事しし

元禄五申年
之那月や鯛をあまとも塩くしら　蕉翁

淀川を伐度を河邊にて鯛よりは塩鯨の稀
なるまて白化を古今の取合なるべし

こな月や君かなさけにあひそめてうくてぬ
鯛をくらもありまりと云家の如ぬまへなるべし

そもしかのうれ鯛といふを俗の国味潟（アチカタ）の浦
私名物にて若狭小鯛與津之所鯛のたくひ所
乃名物なるべし重しうき鯛の旬を書夏の月
とつゝえく

うき鯛の名や揃ちる三四月　蓮支考句
永きりやうき出る魚の舟　俗の素菌句

あら野集
佐保姫や小かんの面いの那しの年　嵐潭

まつの造化の神をさをひめとして書を染る
神といふ深面（フカイノヲモテ）無能藝に用ゆる面にてぶうく

眉のあは面なり　竜田百萬　藤戸　三井寺　名負
葛城に用や

狩野（あら野集）桶に麻をなりまして私のこゝ　荷分

詞書に狩野桶といふ物と其角の餞に送ると
あり予むかし江戸旅屋の比せしに如是場にて食
物を入れ惡まて大小数々ありて甚弁利なる
物のよし捲（マク）もおやうの物とうへえたりこれを狩（カリ）

野桶（ノヲケ）といふ又文政八酉年江戸六草庵の社中乃
句に「狩野（カリノヲケ）桶売に置くや雛子のこゝ忘とつゝ
狩物の句ありあ句ともかゝる場の祈なり志賀
を信濃の何丸と云人近き比大境と云俳書を
出せしの荷分の句の注にかゝ乃ぬけと仮名付
てこれは狩野元信多しくてあるし比ちいさ記
桶に蛍鳥なと画きこれを販て朝夕の料とす

と書り前にいふ句に題とは何丸の注解うけ
ゝさき事とそおもはれ

猿蓑集秋の部

あやまりてぎこう押ゆる鱅の邦　嵐蘭

猿蓑集は蕉門宿才一乃冊子にて撰者は
去来凡兆序は其角跋は僧丈艸何もしく
上足英勇社人にして蕉翁點見は句論なれ
重し思ひあまこ乃句秋の部にあるゝとくあり

不審ありといへども不才淺識の歩簫等きゝめて
ひのこゝろこゝ行の懇とは思なから此道の修
行は今義穿鑿にありと祖翁の今言にし
對してこちらきひの言をいふも且はこゝやひの忠
節とおもへは是を思ひまゝあけつらいをいふ
ものなりせんッきこうと云魚貞徳以来四季題
名の書に見えねば世季のあなるべし鱅（カシカ）は秋の

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』　請求記号 863-113
ガラス使用

和鳴て忍清亮なるを福しき秋の季節に
載せり然るに嵐蘭の吟詠あらはれ鱅(カシカ)
弘て忍をきく句姿にもあらはれ夏季にある川鵜とて
枝川を堰切川がしと云魚猟の体ありかゝれハぎく
うも鱅(カシカ)もともに季節なく只句の風流めに川鵜
乃実情ありて詞に無季にて何となく夏季を
備へたる所嵐蘭の絵骨実に如ましき感へき

句とて見て結る翁の「やらしくやさるに着勢
たる猿乃面も季にとる歴き詞も形くて初去の
句姿動かさぬかのしすあらく季節もて案
まハあれと世季にて自然と云季節あるとれ
結ぶ其句に魂あるのなくて風雅の実を行ふ
ことがたき所なるあし撰者の去来凡兆それ
をしらさるにハあらはれ秋の部に入しハいかなる

意味のあるなん同まほしかれと百年越隔
まれハせんすべきなしもし又稽の部に入
たる事撰集乃麁念なりとも麁念を
君子まも有るべきハ不思議にしたもふべきなり
○ぎじうを色薄赤き小魚にて俗にザスといふ
川魚なり脊鰭に汁ありむさと捕ふべきなり
害ありたるべきなし

○かじか四季題名秋に出て夜鳴小魚之三才圖會
に黄鱗魚 黄魚 俗ニ五里ト云一名加之加 和名抄
加良加古 似鮨(イシマシ)而頰(ニ)著鉤(カキ)金澤浅野川に多(シ)其聲
五里々々といふのことし 所々山谷石間にある小魚
不過一寸又一種長一二寸斑文あり形状似河(フ)
豚(グ)而小其大(オ)者至夜鳴聲清亮にして可愛(シヌ)ト云々
俳書に鱅(カンカ)乃字或ハ河鹿石斑魚俗にゴリ或ハ

千、カフ　又大草家料理と云其書ニ曰

一越川鱠と云ハかぢかと云魚をせしかしく
焼かしらをちらしよに盛なり

一越川汁といふ鱠かぢかといふ魚を升の子白瓜
なと入調ふるなり夏の汁は賞翫なり冬も
まる事あり略してたへをする事も有
この書のみ近来群書類従とかいふにもお待る

よし大草家といふは足利の時代なる故
かぢかの鱠かぢか汁も夏孔川狗魚猟の時節
鱅（カシカ）勿論にして沖鱠といふは沖に出て魚を
ゐるとき海にさらしく調する船中の業に
てせしは川魚を河ゑ孔早衛に洗さらせ
なるなし三餘抄に鱠は諸魚家鮮活なるを
用ひ血鮭を洗ひ浄え醋に和すといへ足せらしい

瀬に洗ふの名越川に川に洗ふの名なれ
亀しや猶考亀し
物はかゞの所事和音流にて鮭なること
云て魚にあらはとなりて名をとれ
ていふ志次前章にいふとく和漢三才圖會
和名抄大和本草を始三餘抄等其外數多
所古書にもかゞられ鮭なる事吾所にて

見ねは古語の例によりて河鹿を俗に云
ちかぶの事として蛙といふ説をとらはれに
無一名二物もある亀名れは偏固にあるとす
ふは有亀かゝはとそおもはあ

五元集
稲葉やくさけるもせれ入る所　其角
此句人これ名句なりとてもてもやし侍るは
其人こそ名句にて侍るやと翁にし尋ける時

祖翁其善を聞くて「稿」あや雲のかた
行五位の郎野老の終や句作をかくあり
きしとの給ひしをり其角の句は是非を
説たるハ予これを有りふに其角の句悪し
きまゝあらねと翁の判にたしかゝあらん
人皆其角の作あるを学ひて道を損ふ事有
重し作あるものハ必ず家ゐひなれハ其角の

句は是非をの給ハ次しくこゝろ此句を
語りなふなる重し作をぬさる事翁なし
かきらはお孔道をもあしあり
「只ゝ蓋ぬ人も帰りぬ二里ハ蓋の鼠は蓋ハかりしく」基俊親臣
「只蓋れハあふ人も那し正木ちる蓋の鼠は蓋ハかりしく」俊頼親臣
俊頼の家正木は詞乃彩色志るをけよかるほとの
評あるよし

元禄六酉年

[illegible]れに嶋の浮巣我見よりて　蕉翁

東武にて露沾公の亭の吟なるに此句の基を
祐盛法師或ハ玄旨法印の説なとにも嶋の
浮巣を海中にある芦なとの莖（クキ）をたのゝ巣を
作る也へに海を渉深に志さひ其巣に浮沈ある
故に浮巣の名あり流れ来るよふものにあらねと
云り志うなに古き家なとに流れ漂ふさ曰もあり

[illegible]もおもふ嶋の浮巣の世にまゝて捨しとや
する見返りもせぬと軽政の詠ありいかしの
是なるや五月雨の此浮巣乃やうを見ると
句意とて

貞享二丑年

山路来て何やらゆかしすみれ草　蕉翁

湖春の此ゝ十年ハ山路によるに成れ
俳諧に巧なりといへども高学なきあやまり

なるとと云り去来のいへく山路に草を詠ぬ説
哥多し志るに湖春は地下の家道者なり
いつて斯ハ難しらはるんいとおもつてのなしと
白双雲も又去来抄の中意にも此論あり予
おもへらく此句を湖春は山路のすゝれと申り
あやまりて難しらはしにや菊の句無山路来
てとあはれは山路より里めきたる所へおたかひ草

を見れは申しとも句にて難解いとこゝ得
かたし又去来も此句は編に清々くいらさぬ
説なせんさくなり西師にも山路来てを山路
にてと聞誤りにやさて此句の事ハ貞享元
甲子仲秋翁深川の居をおもひて
歸ちしをこゝ路に風の志むかの那といふ句
を矢立の始として東海道より伊勢伊賀山城

尾張と拝歴ありて其家に年を越翌
丑の春京より大津へ出ひし途中の吟なり
この紀行は甲子吟行とあるにて其こ話印刻な
られ人々書写してあやまり傳へたる多し
既に明和五年月下とかゝ人甲子吟行の写本
をもてつくるにやとにて標題を整きたし
紀行とせし小冊子をおせしにあや万里多く

句をもとより祖翁の門人孫名さへ書遠へ
ゑる多し其冊子に山話にて何やと誤出
せり此類ひの写本なとみて湖春も疑しまふ
にやおほつの那し

元禄三年年
蔬を着て誰人いふ冬乃春 蕉翁

此詞書にこやこと迄きとこ話に年をむかへてと
ありこ乃句をたゞしくともせつきかたきハ昔も

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』　請求記号 863-113

ガラス使用

遅書よりくやとその句意をいさゝの探り
侍あるに話れいく来ぬるを此篇手門ゟたゞね
たる道すまて尊しいもそうとしこと

元禄六酉年
寒や秘蔵帳をあれは七多羅樹　其角

晋子父乃病中を慰まれ吟なり父我榎東順
といふこの句我同書長文なれは略して寒にいて
寸病父待期の意を取りて堂別の情欲なをほ

の世乃ほよひなれハ家息のかよはん所我厭離せよ
とおもひ切たる時乞先受持法華の正眼成へし
とあり全文ハ萩孔家と云晋子ゟ撰集にアルる意し
さて数句の七多羅樹ハ法華の二十七品荘厳王
経にあり王の子二人その父をおもふかなに躍て虚空
にある事七多羅樹種々神変を現しく
父王のこゝ行浄く信解せしむとある経文乃

こゝ法をとりて其角父をおもふかなに鼓怪をあけ
て涼しかゝしめんとや其角に才あり父の子二
人なれハ妙荘厳王の趣を信受して七多羅樹
とゝ置侍る那ゝん序に云佛経に能くある七
多羅樹虚空のうきをいふなり一多羅樹の高サ
七仭(シン)とあり其一仭と云ハ七尺にて七仭ハ四丈九尺也
それを又七多羅なれハ三十四丈三尺とゝんゝたり

されとも天竺の一尺ハ吾朝の曲尺にて四寸一分なり
といへて日本ハ十四丈六寸三分成へし さて此尺
寸のるゝ為ゆへに用なきむさるゝに侍りを動
きもやらぬ病筆を労し家なき法にてこれをゝん
等人あさゝ侍んも面かはしくいゝ古ちんとおもひて
かゝえ侍まて何そ尺寸ハむさ言のゝなるんや此一生
ハこれをもなれたとおもひ返しているくよし相し

こゝ我書添ふる事ことなりぬ

五元集

こ清ぬるのを大根て消さん秋の月　其角

詞書に松前孫兄にや送り侍るとありこさ吹

といふ事陸奥出羽などまていふ事如よしいくく

宮の曇りたるを云よし東極記に見えたるのをまて

詳に志るさまを句意さしたる我書ぬ曰

万葉集に書あり「こさふうを曇もてすゝろ

はくれ忘てまふ見せて妹が面の月このかなん

嫌まくまて其角も秋の月といひたるにや又宮ハ蛾

夷者雪のごとく成を道我吹ていたく曇らすは術あり

是我胡砂吹といふより常に曇るをもてさふくと

云とあれ又其角の大根て消さんといひしを延壽書と

云に李師逃難入石窟中賊以烟熏之垂死摸得蘿

蔔菜一束嚼汗嚥下甦と云々又ある人云昔山脇

道作冨士裾野にて急病危篤に及べる山
中醫業を求めにしかし所乃老農夫来
りこれハ今さく山氣にあたりまふ成屋し此島にてさく
あゆ事なりとて大根の汁を飲しむにたちち
生活あるし事漫遊雜記にありといへり 姫夫松前

にて其事あるを胡砂吹とふるく
よりいふ事ハ万葉にも詠あるり
元禄七戌年
不思

この君や行人なしにし秋のそれ　蕉翁

祖翁この句みかにて所思の題を見る就ましく
句意を題にありしに行ける事なり詩
奇にも感思の題をあはれを感おこゝろのや俗
諧に云所思も似為（オモヘラク）といふのこなしておに感し
あそれなるこゝ行感思の題に似たる成屋しやす
屋て題によりて其句意感得すべき事あり

管見のおもむきをしばらく止て読子乃かゝえをまつ

ものなるを

十六勺

初編終

附録

所思

埃の来るまゝ物くさく和の机の用

王子稲荷

初年に氣ぬけて坊主で恵の絶

和論語にて

千加しあとりあり家も又

うめ咲やかほしに小枝も寳物

藤ゝ貧家の
うし給ふとけり
筍や明日は賣れて行やうす
掃除の納涼
末かれや鳥も涼しいるをいふ
重月のまとの形る事
ちはくしも給ひれ
名月や明日の人の老ぬ事

老懷
ちりぬ家に老ぬ
松鳴図讃
稲つまや碎けて なほ千松鳥
山路まで
初時雨こゝさぬ栗の柏子の那
月落雲の形いと定きて給
わ死しき和なへの意ぬ事

機の着ふけて師走乃五郎川

右四季十章白翁屋士

かゝれ雨かゝし時はよし那し草の蔓のに
まとふれ人氣以ほしの衰減しゝる草の
以乃ら毛も限あれは屋も弦をぬそ糸
乃なくの歳別まとなる季ぬるよ利なもひ
草のみやく成れは耳とはりのれ旬
そもをそこの志つらんに書そへ言ふ拭庵乃

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』　請求記号 863-113
ガラス使用

863
113

14220

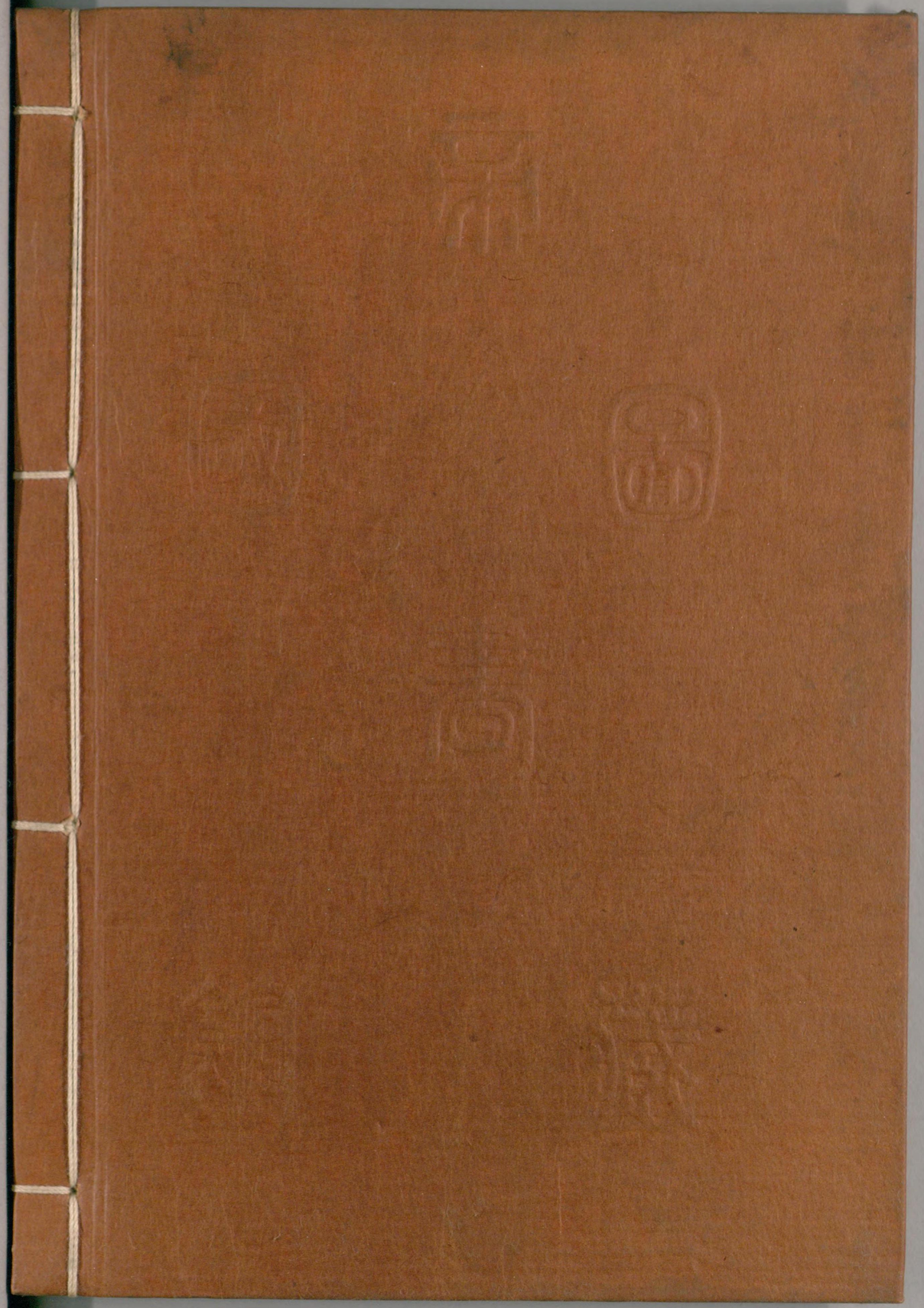
蕉門書林
皇都寺町通二條
橋屋治兵衛梓

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』　請求記号 863-113
ガラス使用

863
113

国立国会図書館　タイトル『よしなし草』 請求記号 863-113

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『よしなし草』 請求記号 863-113

ガラス使用